

小池辰雄著作集第一巻『無者キリスト』を読む(2)

『無者キリスト』第二部 二「砕け」、三「突破・突入」、四「内住・常燃」

2001年5月6日(東京 新宿)

奥田昌道

第二部 人間の福音的実存七相 第二相「砕け」 取税人の祈り 取税人の砕けた心 キリストの砕け 悪人の悲願 第三相「突破・突入」 深みへ漕ぎ出でよ！ 桑の木によじのぼる エリコのザアカイ 人生の決定的瞬間 キリストからの近づきとキリストへの近づき 第四相「内住・常燃」 内住 聖潔 祈り

## ●第二部 人間の福音的実存七相 第二相「砕け」

おはようございます。今日は、『無者キリスト』講筵の第二回目ということになります。月に一回は、小池辰雄先生の著作の中で先生が力をこめてお書きになったしつかりとした著作を読もうということです。なにぶん、『無者キリスト』は大部のものでありますから、どこから入っていったらいいかと思ひまして、この第二部「人間の福音的実存七相」からにしました。先生も、

「この『無者キリスト』を読む時には、初めての読者は第二部から読んでいただきたい」

と言っている。次に、第一部の「キリストの実存十転」を読む。これはキリストを中心にしてお生まれから昇天までをずっとキリストの幾つかの転機を取り上げておられる。第二部の方は、人間の側からどうやってキリストとの接点ができるのかを扱っている。キリストが我々に迫ってくださり、我々はキリストを求め、そういう火花するのはどういう所で起きているかということをも七つの相をもつて捉えられた。

第一回目は「破れ」そして「砕け」を取り上げました。今日は「砕け」「突破・突入」それから「内住・常燃」の三つを取り上げようと思つています。前回の「破れ」という所で既に「砕け」のことが出てきました。先生はやっぱ凄。人間の一番の——本当の姿といつたら変ですけれども——罪や咎とがの表れるどん底の姿は何かというと、「破れ」だということ。しかも、人間はいつも破れているんだと。ただ破れを何かごまかして繕つて、そして済ましているのが一般だけでも、破れるなら徹底的に破れたらいいと。徹底的な破れの姿に気付いたときに、そこから今度は「砕け」に展開すると。破れだけでは、人間はもう死ぬ他ないわけです。それが魂の死であれ、肉体の死であれ、破れだけではどうにもならない。破れは呻きになり、叫びになり、何とかしてほしいという姿になって参ります。そしてそ



の時に、更に深まって「砕け」へ展開しないと、破れっ放しだけではダメなんです。そこに更に砕けという面が入ってくるんだと。私は、「破れ」と「砕け」は一つだと思っています。「破れ」「砕け」というのは、その表と裏というか、そういう一つの姿だと思っっていますけれども、破れから砕けがくる

しかも、その砕けといいましても、人間の側で砕ける砕けなんていうのは大したことはない。実はキリストご自身が砕けの極致を示したのである。そこに気付くことです。砕けの反対は傲慢です。

「私は救いなんかいらぬ。私には何も問題ないんだ」

と言つて、いくら福音がもたらされても、固く戸を閉ざしている。戸を閉ざしているのみならず、極端に言えば、己を神とする。これが人間の本性です、衝動です。神の如くならんとする。キリストは神の前に平伏した。魂が砕けて神さまの前につぶれていらしやつた。そこに神さまご自身が充満なさつた。

「時は満ちた。心を翻してこの福音を信じなさい。天国は近づいた」

と。その天国体であるキリストご自身がそこに立っていただく。だから、「時は満ちた」と言われた。そういう消息を先生は、「破れ」「砕け」そして「突破・突入」のところで展開していらつしやる。

今日は第二相「砕け」という所から読みます。187頁です。もちろん逐一、先生の文章をお読みするわけではありません。ポイントを取り上げたいと思います。ここに出てきますのは全部、福音書のいろんな人たちとキリストとの出会いの場面なんです。出会いの場面で、今日は「取税人の祈り」というところから入ります。「譬話」というふうにキリストは仰っているけれども、当時の生活によくあつたありふれたお話です。パリサイ人の祈りと取税人の祈り。この二つがコントラストをなしている。ルカ伝18章9〜14節とありますので、皆さんもルカ伝18章を開いていただきたいと思ひます。このルカ伝18章というのは、お話がまとめられていて、一番初めの所はやもめの姿ですね。これも先生の大好きな所です。18章1節から読んでいきます。

「<sup>1</sup>また彼らに、<sup>2</sup>落膽せずして常に祈るべきことを、<sup>3</sup>譬にて語り言い給う

<sup>4</sup>或町に、神を畏れず人を顧みぬ裁判人あり。<sup>5</sup>その町に寡婦ありて、<sup>6</sup>屢次その

<sup>7</sup>許にゆき「我がために仇を審きたまえ」と言う。<sup>8</sup>かれ久しく聴き入れざりしが、

其ののち心の中に言う「われ神を畏れず、人を顧みねど、<sup>9</sup>此の寡婦われを

<sup>10</sup>煩わせば、我かれが為に審かん、然らずば絶えず来りて我を悩まさん」と<sup>11</sup>主

<sup>12</sup>いい給う『不義なる裁判人の言うことを聴け、<sup>13</sup>まして神は夜昼よばわる選民の

<sup>14</sup>ために、たとひ遅くとも遂に審き給わざらんや。<sup>15</sup>我なんじらに告ぐ、<sup>16</sup>速かに審

<sup>17</sup>き給わん。されど人の子の来るとき地上に信仰を見んや』

それから今日の所です。



9 また己を義と信じ、他人を軽しむる者どもに、此の譬を言いたもう、<sup>10</sup> 『二人のもの祈らんとて宮にのぼる、一人はパリサイ人、一人は取税人なり。<sup>11</sup> パリサイ人たちが心の中に斯く祈る「神よ、我はほかの人の、強奪・不義・姦淫するが如き者ならず、又この取税人の如くならぬを感謝す。<sup>12</sup> 我は一週のうちに二度断食し、凡て得るものの十分の一を献ぐ」<sup>13</sup> 然るに取税人は遙に立ちて、目を天に向くる事だにせず、胸を打ちて言う「神よ、罪人なる我を憫れみたまえ」<sup>14</sup> われ汝らに告ぐ、この人は、かの人よりも義とせられて、己が家に下り往けり。おおよそ己を高うする者は卑うせられ、己を卑うする者は高うせらるるなり』(ルカ18・1〜14)

ついでこのあいだ、小池先生の「キリスト告白録」第4巻『狭き門』(2014発行)という著作が出されました。その冒頭の所にやはり「審くな」ということが出てきます。その「はしがき」に私は、初めて夏の特別集会に出席した時のことを書きました。その時のお話がこの「狭き門」であり、そこで「四つの非ず」ということを仰った。とりわけ、霊的傲慢が一番罪が深いんだということを訴えておられる。そこに

「霊力的宗教か、道念的福音か」

というところがあります。「曠野の愛」誌にもお書きになっています。その主題、その内容と、今読みました「パリサイ人の祈りと取税人の祈り」、この二つがみごとに一致している。私はあの講筵を「この第4巻全体を貫くキーとなるテーマだ」というふうに捉えました。そこで少しその部分について詳しく「はしがき」で書かしていただいたわけです。

宗教といえますと、どちらかというところ、霊的傲慢に陥りやすい。どの宗教でも真面目な宗教であれば、自分を高め何とか自分が神の心にかかないたいという、その善き心は持つけれども、それを己の力でやろうとする。どんな難しい試験であっても絶対に合格してみせるといふ気持ちは、人間の闘争心に火をつけるから、そういう気持ちでやればやるほど、今度は他の人が愚かに見えてくる。他の人は怠け者であって、腹がたつんですね。

「自分がこれだけ一生懸命にやっているのに、あいつらは何だ！」

といって、審きの心が出てくる。そういう姿がこの取税人を審いたパリサイ人の姿に表れている。実はそれが一番宗教的に罪深いんだということを先生は見事に指摘なさったわけです。

だから、先生の福音の本質は何かというと、その正反対の「砕け」の心です、「無者」です。神の前に自分を何者ともしていないという姿、それに徹しきっている。しかも実をいうと、その徹しきられたご本尊がキリストである。だから、

「キリストのことを私は無者と申し上げる。全世界でキリストのことを無者と言った人があるか」

と、先生は何度も叫んでおられる。



そういうところが、今日の「取税人の祈り」のところであり、187頁から出てきます。

### ●取税人の祈り

《取税人の祈り(ルカ18・9〜14)  
パリサイ人の祈り

エルサレムの北東部にあたるシオンの山に聳える荘厳な神殿は、エルサレム巡礼の憧憬の霊所であった。二人の者が祈るためにのぼって来た。そのうちの一人は、凜然たる容姿の人であった。敬虔な気構えをもって神殿の境内深く内庭にまでのぼって来た。そして心足らわれる面持ちで、立ったまま心の中で自意識強くこつ祈るのであった。声こそ出さぬようではあったが。

「神様！ 私はほかの人たちのように強奪したり、不義なことをしたり、姦淫したりするような者でないことを、或はまたこの取税人のような者ではないことを、あなたに感謝いたします。私は週に二回断食しています。私はおよそ私が取得するもの十分の一をお献げしております。」(私訳)

立派なクリスチャンにこういう気持ちで祈る人が多いんですよ。

「私はこんなにも立派になれたことを感謝いたします。そこらの罪びとと違うようにしてくださったことを感謝いたします。私はこんな働きをたくさんしています。

感謝いたします」

と。これは立派にみえて、実はおそろしい。本当に恐ろしい。そして、人の目にはこのような祈りをする方が魅力的に見える。だから、そういう人の所には人が集まっていく。

「こういうことをやるから、お金を出せ」  
と言うと、みんな喜んでお金を出す。するとますます事業が大きくなる。もちろん、キリスト教以外の宗教だって大寺院を建てたり、もの凄いことをやって人を引きつけますけれども、キリスト教の内部ですら、

「自分はこういう事業をやる。誰か同志はこの指にとまりませんか」

というような形でワーツとやる。そういうのには気をつけないといけないわけです。

私はこの祈りを見ましたら、

「うん、こういう人はたくさんいるな」

と思いました。教会でもこういう証を皆さんなさいますよ。

「私はこんなふうに立派になれたことを感謝いたします」  
と言ってね。先生はこれをどういふふうに言っているかというところ、

この人は自分の縄ばりをしっかり確保する性の男らしい。律法に通じ、律法的な義を定規で線を描くようにきちんと遵っている。女をややもすると不浄とみなし、すこしでも色っぽい女がいれば、けがらわしいと思ったりするほどにまで苦々しい顔つ



きの男であるようだ。また「この取税人」と言っ、並んで立っているとでも思った取税人のことを、心の中で批判して、……内容からいうと、キリストの弟子とならな以前のパウロは、こつこつ型の人間であった。

一体このような道徳堅固な、そして宗教的戒律生活を重んずる人間は、この場合とつうい種類の人であったか。イエスはこの譬話のこの人間をパリサイびととしている。「パリサイ」というのは「分かつ」という意味なんです。分離された人々、分かれたる者つまり汚らわしい人から分離された聖なる者とされた人々。神の民でない者から選ばれて神の民とされた人、分離されて望ましい方に属するような人たちです。

パリサイ人というのは、ヘブライ語では「ペルーシム」といって「分離された人々」という意味で、一般に律法、特にレビ記の聖潔法などを厳守する宗教的党派で、祭司的貴族階級で政治的文化的な色彩をもったサドカイ派と対立していた。

「サドカイ派」の方がどちらかというと文化人なんです。サドカイ派は「復活なんかない。霊もない」と言っている。だから、現代でいえば知的な宗教的な人は「サドカイ派」に属します。それから、戒律を重んじて、もの凄く自分を禁欲的に鍛えあげていく方が「パリサイ派」で、潔癖なんです。ここの祈りで取りあげた人はパリサイ派だった。そういう人たちは、一般人のことを「土民」と言っている。

パリサイ派の人たちは、「土民」(アム・ハアレツ)すなわち律法をあまり知らず、戒律にこだわらない下層の庶民階級を軽蔑して、自分たちを「土民」から「わかたれた者」という自負心をもっていた。

そしてイエスはこの種の人間の特色を一言をもって

「自分たちは義しいのだと自認し、他人を軽んずる者たち」(私訳)

といている。すなわち、自己義認、他者軽視の驕慢きょうまんな、たとい客観的に義であるとしても、それを自認し、他者を批判軽蔑する心根こころねで、キリストにとっては耐え難きものであった。

ここに先生が書いておられる、「たとい客観的に義であるとしても」という、この表現に気をつけてほしい。客観的にはその姿は間違っていない。その間違っていない姿を私わたししていいところがいかにというわけです。客観的にはそれなりに理屈に合っているけれども、それをわがものものにしている。ここに罪がある。

客観的にみれば、キリストほどの義人はありませんよ。客観的にみてキリストほどの愛の人、素晴らしい人はいらつしやらない。しかし、キリストは自分を何者ともしない。サムシング(something) 何ものか、ひとかどの人物)となさらない。ナッシング(nothing) 無、虚無、ゼロ)となさった。そのところですね。しかし、そういうところに着目した先生というのもまた非常に鋭いと思う。パリサイ派は、

歴史的にいうと、紀元前二世紀頃に発したハシディーム「敬虔派」の流れに由来する



一団の人々で、パリサイ派としての活動はヨハネス・ヒルカヌス(紀元前135〜104年)時代から開始されたものとされている。》

少し飛ばしまして、パウロも実は自己義認と他者軽蔑の心根であったと。パウロは自分のことを、

「律法の義につきては責むべきところなし」

と言っていたけれども、実は心の中に葛藤があった。熱心であればあるほど、律法について落ち度なき者であればあるほど、自分の心の中に空虚さがあった。そして、最初の殉教者であるステパノとかさういった人たちの姿とは何か違うと感じていた。ステパノは石打ちにされながら、

「主よ、彼らを赦し給え、わが霊を御手に委ぬ」

と、キリストと同じ姿になって殉教していった。ステパノの殺害に賛成していたパウロはその前に坐っていた。そしてステパノには敵わないと思っただけです。そのことが書かれている191頁の方にとびます。

《ここにおいて明らかなのは、イエスが自己を何ものかとして自己義認する宗教的、

道德的な心のあり方を偽善として蛇蝎視した一事である。》

マタイ伝の所に出てきますね、偽善なる学者パリサイ人といい、彼らは祈りを長々と会堂や辻の街角まちかどでやっている。みな人に見せるようにやっている。キリストは、

「隠れた所にいます隠れた父に祈れ」

と仰った。その辺を捉えた。

イエスが自己を何ものかとして自己義認する宗教的、道德的な心のあり方を偽善として蛇蝎視した一事である。自己義認は必ず他を見くだす角度となる。否、更におそろしいことは、神に対しておのれを立てることになる。これはサタンの角度で、イエスの宗教、イエスの信仰と正反対の角度なのである。イエスにとって霊的、高慢が最大の罪であった。

ここに出てきますね、霊的高慢が最大の罪であると。

イエスは自らを神の前に何者ともしなかった。そのことはいずれ他の項でじっくり語るが、私がイエスを無者むじやというのはそのことである。》

実は人間には共通的にこういうパリサイ的角度が巣くっている。何も特殊なある種のグループの人たちだけではない。誰の心にもこういうものが巣くっている。それが非常にハッキリ現れるか、隠れているか、程度の差であって、そこに気付かなくてはならないというわけです。

## ● 取税人の砕けた心

次に192頁の「取税人の砕けた心」のところに入ります。取税人の仕事は税金を取り立て



てローマに持つていくことです。そこで必要以上に取り立てて、一部は自分の懐ふところに入れる。ですから、人々から非常に嫌われていたわけです。貢みつぎ先は自分たちを支配しているローマですから、売国奴という目で見られていた。さらに私腹を肥やしていた。そういうことで非常に嫌われていた。あとで「ザアカイ」の話が出てきますが、ザアカイもその一人だった。ところが、この取税人は自分で自分を吐き出したい気持ちになっている。

### 《取税人の砕けた心》

……この取税人の生れつきの性情の中の欠陥は守銭奴しゆせんど的なものであったか、打算的な性癖であったか、ものほしさであったか、狡猾てうかつさであったか。それはどうでもよい。彼は誰よりも自分を知っている。自分で自分を吐き出したい気持ちになっている。彼は神殿にのぼって来たものの、やりきれない気持ちで一步も中に入れなくなった。ただ神の大慈悲におすがりするほかはない。心は砕け、立っていた脚もくずれかかる。

人間は誰の胸にも自己義認的。パリサイ根性もあり、利己的な守銭奴的取税人根性もある。その他もろもろの罪の衝動が混在している。要するに自我という慾心が罪で、この自我が砕けるか砕けないかにおいて、人類は最も根本的に二分されると思う。…その人のたましいが砕けるか砕けないかだけである。

いろんな人間の属性がここに出てきます。民族、国家、人種、社会層、主義、主張、イデオロギーなどである。けれども、そんなものは神さまが天国と地獄を分かち振り所ではない。天国と地獄、神の人とそうでない者とに分かつ根本は、この砕けるか砕けないか、砕けの魂か砕け得ぬ魂か、そこにあると。

もっともらしい祈りをもって自己義認をした偽善者。パリサイびとは義とされず、却て、「神様、あわれんで下さい、この罪びと私を」と平伏したましいとなって叫んだ取税人が「義とされて『ディカイオーメノス』自分の家にくだっていった」とイエスははつきりと言った。

砕けざる義人(偽善者)パリサイ人は地獄ゆきとなり、砕けたる罪びと、取税人は天国ゆきとなった。イエスの鋭い人間批判と深いあわれみとをここに見る。このあとに「おのれを高うする者は卑ひつされ、己れを卑する者は高うせられる」という言もつけ加えられてある。勿論いわゆる低姿勢などというものではない。本当に平伏しの心、砕けのたましいとなることである。》

これが主の喜び給う姿だと。そして、イエスと共に十字架にかけられたあの盗賊もそうだったわけです。一人は、

「あなたが御国にお入りになる時に私を覚えてください」と砕けて願った。



## ●キリストの砕け

194頁、「キリストの砕け」の所です。人間の砕けはまだ中途半端なものです。そこで、徹底的に己を砕いてくださったキリストの砕け、それを我々は賜る。砕けすらも賜るんだと。破れというのは、自分で自分を破つてしまうわけです。そういう惨めな姿にいろんなきつかけでなってしまう、自分の生まの姿が破れた姿ですけれども、そこから「砕け」に展開していくのは、これは神さまの側からの恵みに依ります。砕いていただくという、砕けを賜る。そして砕けの極致であるキリストそのものをいただく。そこでイエスさまと一つになれる。

## 《キリストの砕け》

砕けるか砕けないか、天国か地獄か、人類を二分する最大の区別！キリストは人間をそのどちらかに分ける。そして実は万人がこの砕けのたましいになることを本願しておられる。その本願のすがたが、砕けの極み、十字架のキリストなのである。そのことはキリストの「十字架」の項でつまびらかにしたが、端的にいえば、根源的には砕けきることのできない人間の罪を荷って、十字架で贖罪しているのがキリストの砕けなのである。》

普通のクリスチャンならば、この「破れだよ、砕けだよ」と、ここまででは気付かれると思う。しかし、そこから先は、

「だから、あなたはまだ砕けていない。あなたはまだ砕けが足りない、もつと砕けなさい」

と、これで終わるんです。ところが、先生は、

「人間は砕けきれぬものではない。砕けきれぬ人間に代わって、ご自分を砕いて、そのご自分の砕けをあなたにやるよと、これを受けとりなさい。キリストがこのように迫ってきたら、もう砕かれてしまっているんだ、涙しかないんだよ」

「はい、そうでした」

と受けとった。これが福音なんです。

「あなたは砕けが足りないから、もつと砕けなさい」

と、これは律法です。ところが、多くのキリスト教会はそこで止まっている。

「あの兄弟はまだ砕けが足りない。私はもつと砕けたから」

と。ちやうど、

「あの兄弟は信仰が足りない。私は信仰があるから」

と、これも同じことですね。すべて私わたくししている姿です。そうじゃなくて、

「この砕けの極致であり給うキリスト、そのキリストの砕けをあなたにやった。十字架を見てごらん。あなたは砕けてしまっているじゃないか。あの十字架であなたはもう既に砕かれてしまっている。だから、「砕けられない、砕けられない」な



んて心配しなくていい。もう砕かれてしまった。終わったんだよ」と。それがもう本当にありがたい。だから、先生はいつも

「十字架のもとに平伏す<sup>ひれふ</sup>」  
と仰った。

《だからパウロが告白した、「私はキリストと共に十字架された」(ガラテヤ2・20)と。それは「私はキリストが私の自我というかたくなな罪を荷<sup>に</sup>って、十字架の砕けをもつて贖罪して下さったので、はじめて本当に砕かれた。こうしてキリストの砕けを賜わったので、私自身は現実にとつてあるごとく、根源的に砕かれて、自我から自由になった」という意である。

相対的な自分が砕けているか砕けていないか、そんなことすら問題にならない。砕けていようが砕けていまいが、キリストはご自分の砕けをただで差し出してください。それが十字架だ。仰ぐのではない、キリストがかかってください。十字架の中に自分自身の姿を見るのだと。いただいたんです、そこで一緒になってくださる。キリストの方からそこで一つになってくださる。

砕けきれぬ「この罪びと私」のために、十字架のキリストが、砕けそのものを与えた。取税人の「われをあわれみ給え」のねがいは、十字架の贖罪のキリストにおいて聴かれているわけである。であるから、自分が砕けるか砕けないかということは、実は相対的判断であって、それはもはや問題でない。この「私」「自我」「罪びと私」は、あそこに、キリストの十字架に砕かれてあつた、ということに気がつきさえすればよい。そこに砕けが与えられ、まことの平伏しとなり、罪から解放されている無者とされている。これが我々一人一人の告白となるまでは、真の砕けが根源現実とならない。

「根源現実」は先生の好きな言葉ですね。それと対比される言葉は、「相対的」「我々に見える我々の姿」「相対的な現実」「相対界の我々」などです。その奥にキリストの「絶対的根源現実」がある。

「絶対次元の根源現実はあるものだよ、あなたが相対現実でどんなに揺れ動いていようが、どんな姿であろうが、そんなことは問題にしない」

と。キリストの砕けが突破突入して来てくださるんです。あとで「突破・突入」のところに入りますけれども、実は「突破・突入」も「砕け」も一つであり、キリストの砕けが突破突入して我々を砕いてしまう、そこへ聖霊がまた宿ってください、すべて一つの事態なのです。

キリストの砕けという恩恵の事実をわが根源現実として信受しつつ、つねに新たに相対的な我も砕かれてゆくというものである。

相対的我也自然に砕かれていくんです。しかし、それを問題にしないということが大事です。必ず我々はキリストの御姿に化せられていく。自分で変えていくのではない。キリストの



力が凄いですから、その根源現実が宿りますと、それが自己展開していつて、気がついてみたら、眩い姿まぼゆになつていたと。けれども、自分はちつとも眩いとは思っていないというわけです。

「自分を問題とするな」

というのはそういうことです。「いつまでも泥んこの中で呻いておれ」とは仰らない。泥んこの中で呻いている自分が主さまに叫んだら、砕けを賜つて、いつしかそこから足を洗われて、相対的にもきれいなやつになって、きれいなおべべを着せてもらつて、どこの貴公子かと思われるような姿に変えていただけ。皆さんも素晴らしい美男美女に変えていただけというんですから、結構な話ではありませんか。しかし、そんなことはちつとも自覚なきらないでいい。それをしてくださるのが恵みの実力なんです。

このようなキリストのめぐみの玉砕を信受しつつ、めぐみの玉成へと進みゆくのである。」

「玉砕ぎやく」という言葉は、50何年前になつてしまふけれども、日本が太平洋戦争の南方の戦場で次々とアメリカ軍に破られていく様を表すものとして使われました。その時、日本人は捕虜になることをもの凄く恥だと思つているから、一兵残らず全員戦死する。それを「玉砕する」と言つたわけです。玉と砕ける。ガダルカナル島、硫黄島、サイパン島といった所で玉砕したと言われています。ここで小池先生はその「玉砕」という言葉を使って、砕けの極致を表したわけです。しかし砕けの後、キリストは素晴らしい霊体に変貌をとげる。死に放しではない、砕け放しではない。必ず変貌を遂げ、「玉成ぎよくせいする」、玉と成つていく。このことが我々にとって、主にある素晴らしい望み、恵みであります。

### ●悪人の悲願

続いて本文には、イエスが十字架に懸けられた時、同じく十字架の極刑に処せられた二人の悪人のことが書かれています。このうち、心が砕けた一人の悪人のことについて少し触れておきます。

《砕けたる悪人

……他の一人はイエスにこういった。

「イエスよ、御国みくににお入りなさるとき、(現行訳、「み国の権威をもつておいでになるとき」)こんな奴ですが、憶えて下さい！」(私訳)

惨憺さんたんたる人生を送つたこの者が、いまわのきわに十字架の苦しみのどん底から発した全的に砕けた心の悲願、血の切願であった。孤独と絶望！ 悔恨と悲嘆！ 地獄の劫火じやくかが待っている終末の一瞬。地獄の鬼が墮おちゆくおのれを呑みこまんと口を開け歯をむき出ししているおそろしい光景が目についたでもあろう。

しかし、イエスはこの悪人の断末魔の一言をハタと受けとめた。彼は何と答へたか。



「私は本当にお前に言う、今日、私と一緒に、おまえはパラダイスだ！」(ルカ23・43私訳)

一番、地獄に近かった人が、いの一番にキリストと一緒にパラダイスに入ってしまったと……十字架上のイエスのこの言以上に慰め深い言はない。地獄ゆきが天国ゆきに一变する歓喜以上の歓喜が世の中にあるうか。地上のどんな歓びも、パラダイスに迎えられる歓びにまさるものはない。然り、日々は天国であらんがために、ただ砕けの魂で生涯を費いてゆきたいのみである。「今日、私と一緒に、おまえはパラダイスだ！」このようにキリストから呼びかけられつつ、毎日毎日歩くにまさる生活があるうか。人生の暗雲、風雨、酷暑寒冷、いかなる現実にもめげず、春の野を往くが如しである。そういう悲願霊願で、このキリストの本願に助けられつつ進んで往こう。」

### ●第三相「突破・突入」

次は「突破・突入」という第三相のところに入ります。ここで取り上げられていますのは、ルカ伝5章のペテロなど漁師を弟子にする話と19章の取税人ザアカイが桑の木によじのぼる話の二つの所です。まず、ルカ伝5章のペテロなど漁師を弟子にする話の所に行きます。もう皆さんは何度もお読みになつておられると思いますが、その情景が目当たり浮かぶようなお気持ちでここをお読みになると思いますが。

「1 群衆おし迫りて神の言を聴きおる時、イエス、ゲネサレの湖のほとりに立ちて、

2 渚に二艘の舟の寄せあるを見たまふ、漁人は舟をいでて網を洗い居たり。

これは朝の風景です。夜通しペテロたちは働いて、何も獲物がなくて、がっかりして網を洗つていた。そこへイエスがおいでになつて、じつと見ておられた。

3 イエスその一艘なるシモンの舟に乗り、彼に請いて陸より少しく押し出さしめ、坐して舟の中より群衆を教えたもう。

湖面は波ひとつない鏡のような静かな朝だったと思います。舟に乗って陸から少し離れて、そこから陸上の群衆たちに話しかけられた。だから、ずいぶん大きなお声だったんでしようね。多分、沖から風が吹いてきますから、声はよく通つたんでしよう。そして、

4 語り終えてシモンに言いたもう『深処に乗りいだし、網を下して漁れ』5シ

モン答えて言う『君よ、われら終夜、労したるに、何を也得ざりき、されど御言に随いて網を下さん』6かくて然せしに、魚の夥多しき群を囲みて、網裂けかか

りたれば、7他の一艘の舟におる組の者を差招きて来り助けしむ。来りて魚を二艘の舟に満たしたれば、舟沈まんばかりになりぬ。8シモン・ペテロ之を見て、

イエスの膝下に平伏して言う『主よ、我を去りたまえ。我は罪ある者なり』9こ

れはシモンも偕に居る者もみな、漁りし魚の夥多しきに驚きたるなり。10ゼベダイの子にしてシモンの侶なるヤコブもヨハネも同じく驚けり。イエス、シモンに



言いたもう『懼るな、なんじ今よりのち人を漁らん』<sup>おそ</sup> 11かれら舟を陸につけ、一切を棄ててイエスに従えり。」(ルカ5・11)

実に美しい素晴らしい情景です。イエスさまも、群衆には語るべきことは全部語り終えて、「今日のお話はこれでお終い」と言い、それから今度は、シモン・ペテロに向かい——群衆は一般の方々です、そのお話はそれとして素晴らしいと思ったと思う——このペテロを捕まえようとしてペテロに一对一で向かわれた。

「シモンよ、舟を少し沖へ出してくれないか」と言った。ペテロは、

「ああ、よろしいですよ」

と舟を出した。しかも、普通の方だったら、「ちよつと海を見たいんだよ」とか、「私は海が好きなんだ、朝の海は美しいからね」とか言ったかもしれない。まあ私だったらせいぜいそのくらいの話です。ところが、このお方は、

「深みに乗り出し網を下ろして漁れ」<sup>すなご</sup>

「えっ、ちよつと話がちがうのでありませんか。先生、あなたの役割はさつき群衆にお話しになった、あれで終わってます。ここからは漁師の私の領分ですよ。どこへなりともご案内しますから、仰ってください。行きますよ。向こうの島が良かったら向こうの島へでもご案内します。素晴らしいお話を聞かせてもらったんだから、御礼にそのくらいのことにはしてさしあげますよ」

と、ペテロはそんなつもりですよ。ところが、

「なになに、深みに乗り出して網をおろして漁れ？ あなたは漁師の私に命令するんですか。それはちよつとお門<sup>かど</sup>違いではありませんか。神の国のことはあなたのご専門。しかし、海の魚のことは私の専門なんですよ」

と。実は、海の魚も天地万物の創造主でありたもうこのお方の御手の中にあるのに、それにペテロが気付かないものだから、ちよつとプライドが傷ついたわけです。おまけに、「旦那さん、昨日一晩働いてクタクタになつて、網を洗っていたら、あなたが来て、素晴らしいお話を聞かしてくださったから、私も今いい気分です聞いていたんですけれども」

と、そんな情景ですよ。先生はここをどのように捉えておられるか。200頁の所です。

●深みへ漕ぎ出せよ！

《深みへ漕ぎ出せよ！(ルカ5・11)》

……イエスはその一艘であるシモン・ペテロの舟に乗り、ペテロに少しく舟を押し出してくれと頼んだ。イエスは舟板に腰を卸して舟の中から群衆に道を説いた。語り終るとペテロに言った。



「深みへ漕ぎ出でよ！ 網をおろして漁れよ！」(ルカ5・4 私訳)

と。突如たるイエスの勧めに驚きながら、ペテロは答えて言った、

「先生(エピスタータ)、夜通しやってみたんですけど、空らつきし駄目でした。だけれど、お言葉通りに網をおろしましょう！」(ルカ5・5 私訳)

ペテロは漁りにかけては多年の経験を積んだ玄人漁夫である。漁りのことにかけてはイエスといえどもかなわなはずである。昨夜の時化から判断して、今日漁獲があるとは考えられないから、網を洗って、しばらく様子を見ようとしていたのだろう。

しかしペテロが、素人なるイエスの言葉を卒直に受けとめ、「だけれど」といって自分の玄人判断をも突破して、直ちに順ったところに、信仰の大切な気合があった。しかもそれは「深みへ漕ぎ出でよ！」である。

信仰とは、自分の過去の経験、一般の常識、状況の判断をも、ある時点においては、換言すれば、神意の動く時点においては、突破し、深みへと大胆に突入することである。そのためには、欲心、私心を脱する祈り心が大切である。

イエスの言を信受し、直ちに信従し、深みへの行動に出た。これが自己突破、神意突入である。果然、大漁で網も裂けんばかりであったので、他の一艘をも差し招いて援助を求めた。》

ここが大事なんです。ね。

「イエスの言を信受し、直ちに信従し、深みへの行動に出た」

と。信仰はじつと留まっていけないんです。

「床を取りて歩め！」

と、これですよ、イエスさまの言葉というのは。ヨハネ伝9章に出てくる盲人の癒しの例です。

「あの、シロアムの池へ行行って洗ってこい！」

と。その時に、

「病人の私に向かつて、あなたは何を言うんですか!？」

と言ったらもうダメ。他ならぬこのお方が、「床を取りて歩め」と仰った。何か感じた、もう動き出した。その時に癒されていた。

「シロアムの池へ行行って目を洗って来なさい」

「はい」

と言ってそこで洗った。目が見えるようになった。信仰というのはそういうふう動き出すんです。だから、「静動一如」とよく先生は仰った。

「祈りそのものがもの凄い内的な行動だ」

と先生は仰います。

「祈りの中でキリストの中に自分は躍り込んで入っている。躍り込んで入っている



時に向こうから凄いものが流れてきている。そこでからだは靈動します」

と、そういうことを仰います。だから、この祈りの姿で魂が、内的なものが動いているか。それから、からだは本当に動いていくか。これはどっちも同じなんです。信というのは、神さまの言、神の御方に圧倒されて、それに押し出されて、「はい」と応えていくこと。向こうから来たものに「はい」と答える。その姿なんです。それを単純に率直にやる人はみんなイエスさまから素晴らしいものを受けとった。だから、それを批判的に、

「そんなことがあるだろうか？ そんなことをやったら、変に笑われやしないか」

とか、そういう周りを見たらダメなんです。波を見たらダメ、風を見たらダメなんです。

「まあ来い！」

と言われたら、ペテロは波の上を歩いていった、その姿です。これが信仰の秘訣だよと。

「イエスの言を信受し、直ちに信従し、深みへの行動に出た。これが自己突破、神意突入である。」

と。自分の側からは突破、向こうからは突入。「突破・突入」というのは、自分の主観的な自覚では、現状を打破して突破して行こうと、キリストへ投げかけていく。向こうからはキリストの方はそれ以上に突入してくださるという、このぶつかり合いなんです。ペテロは本当に驚きました。これは何も魚がたくさん採れたから驚いたというよりも、

「この人は何だ？ さつきまで群衆に向かつて神の国のことを語っておられるかと思うと——昨日あれだけ働いて魚の一匹も出会わなかったのに——今日は魚の大量が押し寄せてきているではないか！」

と。私は、キリストがお話しておられるあいだに、魚までが引き寄せられてきたのではないかと思うくらいなんです。キリストには魚の大量があそこに来ているのが見えて、そこへ舟で行って網をおろせと言った。だから「まあこの人は何という人だろうか！」と思って、彼らは驚いた。

《……あまりの大漁に全く驚嘆したのである。そしてこの大漁をただよろこんだのではない。大漁という現象、徴を見てこの徴を起こしたその人に対して驚異と畏敬の念に打たれ、平伏したのである。》

「徴」というのは、その徴そのものに囚われてはダメなんです。五つのパンと二匹の魚、それで五千人の人——女と子どもを入れたら一万人の人——が満ち足りたという。このパンはどんなパンだろうかと思つて、パン屑を分析したりしてパンに囚われたりしたらダメ。その子どもからパンをいただいで、それを献げて神さまに祈られた。そしてパンを裂いていかれた。そのお方そのものにぶつかつて、

「この人は凄い。私は罪ある者です。私のこれまでの判断、経験、それを全部投げ出して、あなたの御言に従います。何をしたらいいのか教えてください」

と。ペテロの気持ちは、「罪ある我を離れたまえ」と、そんな気持ちです。復活のキリスト



に出会った時にもそういうことをペテロは言っています。

ゼベタイの子でシモンの友であるヤコブもヨハネも同じく驚嘆した。ルカはしかし大漁に驚いた、とのみ記して、この徴を起こしたこの霊人に驚いたとは記していないが、筆の奥は、大漁ではなく、大漁を起こした霊人を指すと見るべきであろう。

おのれを罪ある男と自認し、平伏した。ペテロの態度はいかにもペテロらしい。

イエスは。ペテロの正直な心根を受けとめて、

「おそ懼れるな、おまえは今から人を漁すなることになるぞ」(私訳)

まるで網を打って捕らえたあのお魚のように。

「それはペテロ、これからのお前の姿だ。お魚はキリストの言に、あるいはキリストというお方に引き寄せられて、ああして集まってきた。今度は、お前を通してこの福音に吸い寄せられる、そういう人々の魂をお前は捕らえて、その人たちを神の人に変える。それがお前のこれからの役割だ。いわゆるお魚を採る漁師としての役割は終わった。今からは新しい人となって、新しい出発だ。さあ行け！」

「はいっ！」

と、ペテロたちは従った。これが出会いということですよ。

昔の日本の方々に、道を求めた人はそういう出会いを求めた。出会いを求めて日本全国を<sup>あんぎや</sup>行脚して、師を求めた。そして師に値する方に出会ったら、お願いして、「よし」と言ってくださるまで絶対に動かないという姿ですね。「<sup>だるま</sup>達磨大師と<sup>えかだんび</sup>慧可断臂」の話もそうです。

〔註：「慧可」は中国南北朝時代後期の禅宗の高僧。「断臂」はひじ(腕)を切り落とすこと。禅宗の高僧慧可は少林寺にいた達磨の教えを乞うたが、達磨は壁に向かって座禅するばかりだったので、慧可は大雪の夜、自らの腕を切り落として、求道の思いを示した。〕

そういう道を求める心、それが現在では失せてしまった。その道を求めて、道に出会ったときの喜び。その師に、恩師に出会った喜び。そういうものを教育の中で気付かしてあげないと、本当の教育にならない。それにはそれを語る人がその体験をしてなければダメです。

「私はこのお方に会って私の人生は変わりました」

と言える方の存在。私を変えてくださったのはキリストさまですけれども、そのキリストさまへのパイプ役になってくださった方が、初めは市川喜一兄弟でしたし、それから小池先生でした。小池先生は私にとっての生涯の師になったわけですから、その先生に囚われたらまたダメです。先生があのように平伏して叫んでやまない、主イエス・キリストという、ここに驚嘆しないとね。そうやって、道に生きた人は自分が道であり、同時にその方は主イエス・キリストを指し示している。その方は無者だと仰っているんですから。

「自分を見た者は父を見たのである」

と。自分は空っぽだ。サムシング(something)何ものか、ひとかどの人物)となさっていない。



「なぜ我を善き者と言うか」

と。だから、そういう道の世界というのは、私は万国共通だと思っている。およそ人であるかぎり、みんなどの国の人にも道を求める憧れあこががあると思う。

でなかったら、ヨーロッパから禅を求めて、わざわざ日本へヨーロッパ人が来ないですよ。ヨーロッパ人は、観念化された知的なキリスト教にもう飽きてしまって、あれでは救われないと思って、何か日本にある神秘的なもの——それは禅あるいは弓道とか茶道とか、何か日本人が生活そのものの中に持っているもの——そうした神秘的なものに憧れて、日本にやって来るんですよ。その源は実は、

「我は道なり」

と仰ったイエス・キリストにあつたということ、東洋の一角で叫んでいる人がいたというのですから、そのことを我々は胸を張って語らなければならぬ。しかも、日本人はそれに気付いていないんですから。

私たちは同胞に対してもそのことを証する責任があります。先生は仏教の中の素晴らしきものを取り上げてくださっています。それから、孟子や老子や孔子といった中国の素晴らしい人たちも取り上げています。インドの人も取り上げています、ガンジーだとか、もちろん仏陀も。マリリン・モンローまでも取り上げていますからね(笑)。

先生は、世界の宗教関係者すべてを扱う専門家ではない。しかし、その魂が本当にあけつひろげで偽りがなくて、本ものに感動している魂——版画家の棟方志功むなかたの「板極道」、即ち版画を「板画」と称し、その道を極めるのもそうです——そういう本ものに触れて、本ものにつつかつた喜びにうち震えている人は全部わが友なりと思っているわけです。それを色眼鏡めがねなしに、

「それでいいんだよ、私はあなたを愛しているよ」

と言って呼びかけてくださっているのがキリストの愛なんです。

この「網あみをおろして」とあります、その網は愛の網です。キリストという愛の網なんです。その網をおろして、その愛の網の中に全部入れてあげようと。

「ガラクタのような人であっても、その人たちも光り輝くように私がするから、大丈夫だ」

と。どんな人間だって、ガラクタは一人もいない。みんな神さまの作品だ。そのように造られているんだと。そのためには転換が起こらないといかん。その起こる手順が、「破れ、砕け、突破・突入」と、こうやって行くんだと。そういう意味で非常に先生の告白は普遍性を持っていると思います。

### ●桑の木によじのぼる

次に、取税人ザアカイが桑の木によじのぼる話です。これがまた面白いですね。これを



先生は「曠愛新書」第2巻「『桑の木によちのぼる』1965年発行」で出してくださいました。ルカ伝19章1節から、

「1 エリコに入りて過ぎゆき給うとき、<sup>2</sup> 視よ、名をザアカイという人あり、取税人の長<sup>かしら</sup>にて富める者なり。<sup>3</sup> イエスの如何<sup>いか</sup>なる人なるかを見んと思えど、丈<sup>たけひく</sup>矮うして群衆のために見るに能わず、<sup>4</sup> 前に走りゆき、桑の樹にのぼる。イエスその路を過ぎんとし給う故なり。<sup>5</sup> イエス此<sup>こゝ</sup>処に至りしとき、仰ぎ見て言いたもう『ザアカイ、急ぎおりよ、今日われ汝の家に宿るべし』<sup>6</sup> ザアカイ急ぎおり、喜びてイエスを迎う。7 人々みな之を見て眩<sup>つみや</sup>きて言う『かれは罪人の家に入りて客となれり』<sup>8</sup> ザアカイ立ちて主に言う『主、視よ、わが所有<sup>もちもの</sup>の半<sup>なかば</sup>を貧しき者に施さん、若しわれ誣<sup>し</sup>い訴えて人より取りたる所あらば、四倍にして償<sup>つぐの</sup>わん』<sup>9</sup> イエス言ひ給う『きよう救はこの家<sup>きた</sup>に来れり、此の人もアブラハムの子なればなり。<sup>10</sup> それ人の子の来れるは、失せたる者を尋ねて救わん為なり』(ルカ19・1〜10)

エリコの町を通つてずうつとエルサレムへ入つていくわけです。そういう最後の場面で。その時にザアカイ、これは「取税人の長<sup>かしら</sup>」と書いてありますから、さっきの譬<sup>たとえ</sup>話の取税人はまだ下<sup>した</sup>端<sup>つば</sup>役人だったかもしれませんが、こつちはだいたい身分も位も上なんです。だから、相当私腹を肥やしていたらしい。取税人の中でも一目置<sup>いちもく</sup>かれてるやり手だったかかもしれません。ところが、この人は背が低い。イエスさまの行列が通つていくのに、人だかりで自分は見えない。ピョンピョン跳ねても見えないわけです。だから、非常手段を使つて桑の木によじのぼった。イチジクグワといつて、非常に太い幹<sup>くさき</sup>だったそうです。人間がゆうにのぼつて下を見下ろせるような凄い桑です。楠<sup>くすのき</sup>木みたいなものでしょうかね、日本でいうと。そういう木へのぼつて、上から行列を眺めている。イエスの方からは仰ぎ見ておられるから、上下関係が逆です。普通なら「無礼者！」とか言うことになる。それこそお殿様の行列なら「下に、下に」といつて通つて行くから、「頭<sup>ず</sup>が高い、引きずりおろして召し捕<sup>と</sup>れ！」というようなところでしようけれども。イエスはちゃんとザアカイの心を見おられる。きつとザアカイもイエスさまのことをずつと人づてに聞いて、

「これはなかなか凄い人らしい。一目見ておきたい」といつて、桑の木にのぼつて行つた。先生はこの、

「前方に走り出て行つて、そして桑の木にのぼつた」といつて、

「信仰の体勢<sup>たいせい</sup>というのはこの姿勢<sup>しせい</sup>が大事だ、教室でも後ろの席に坐つていたらダメだ。一番最前列に出てきなさい」

といつも言われる。これは僕は本当だと思えますよ。もう先生の唾<sup>つば</sup>が飛んでくるくらいな前の所にいたらいい。唾<sup>つば</sup>の中に御霊<sup>みたま</sup>の因子が入っているかもしれないよ(笑)。先生は、「霊波<sup>れいぱ</sup>」ということを仰る。



「語る言葉と同時に霊波が流れているはずだ。その霊波に触れれば、自分の魂がそれに響き合うはずだ。だから、最前列に坐れ」

と仰る。そしてやっぱり、その語り手の目を見て語る。私も聞いてくださる方の目を見たりしながら語るようになったけれども。うつむいてしゃべったらダメなんです。大学の授業でもそうですよ、うつむいてしゃべったらあかん、ボソボソボソと。やっぱり学生の顔を見て、面構えを見て、そして向こうに身を乗り出してしゃべる。向こうも聞いてきます。講義でザワザワザワ雑音が多いというのは、半分は教師の責任ですよ。教師が身を乗り出してしゃべる。そして学生が何か内職してたら、「あなた、何しているんだ!」  
と言い、二人でしゃべっていたら、

「あなたたち、きつと大事なことをしゃべっているんだろ。手を挙げて質問してごらん。答えるから。そうだろ?」

「いいえ、いいえ……」

と(笑)、シーンとします。私の授業はみなシーンとしています。それは全部この小池先生の気合からきているんですよ、私にとっては。

私の法律の方の恩師も本当に身を乗り出してしゃべっておられました。全然、資料を見ない。その講義の前夜に、全部しゃべることを頭の中でずっと反芻して、そして、しゃべる時は何も見ないで2時間ぶつ通してしゃべる。定年になって、次の大学へ行くお話がきても、全部断られた。なぜかという、もう定年まぎわになると、2時間しゃべっているうちにパツと空白ができたと言う。これをしゃべって次に何をしゃべるかという時に、パツと空白ができた。だから、自分はもう講壇には立たない方がいいと思ったという。私にもう恥ずかしくて恥ずかしくてね(笑)。

「何か見なければならぬ」

と私が言いますと、

「それは君がまだ充分にわかっていないからだ。自分で充分に本當に咀嚼したら、何も見る必要はないはずだ。何かを見ないとしゃべれない、講義できないという

のはまだまだダメだよ」

と仰った。そういうダメな教師が一杯ウロウロしているわけですよ、私もその一人ですけれども(笑)。私の法律の先生はそういう先生だった。宗教の、霊の世界の先生はまたこういう先生ですし、凄い二人の巨匠に私は出会ってしまった。そういうことでした。

そうしたら、イエスキさまもザアカイをじつと見つめて、

「5……『ザアカイ、急ぎおりよ、今日われ汝の家に宿るべし』」

どうして名前を御存知なのかと思うけれども。仰ぎながら、

「おいザアカイよ、おりてこい。私はお前の家に絶対今晚泊まるからね」

と。宿泊の予約も何もなしですよ(笑)。「今日われ汝の家に宿るべし」という、この「宿る



べし」の「べし」は、「絶対何々するからね」という強い「デイ」という語だ。この本に書いておられる。普通の人からすれば、

「あの人は、どあつかましい。初対面の人の家に押しかけて行くなんて」と、こう思ったか知らないけれども、ザアカイは嬉しくてしょうがない。「ザアカイ、喜びて」と書いてある。

6 ザアカイ急ぎおり、喜びてイエスを迎う。

とある。これが本当の世界なんですよ。「喜びて」なんです。嫌々いやじゃないんです。魂が火花しているところには喜びがある。そしてしかも、ザアカイは何と言ったか、

「私は今まで少々エグイ取り立てをしてきました。こいつは金持ちだと思ったら、まきあげるぐらい取り立てました。ローマの方にもたくさん納めて、あいつはよく働くと褒められていた。それからもちろん自分の懐も増えました。でも、それを全部返します。取りすぎていたものは全部返します。そして、あなたのお弟子になります」

という気持ちですね。それでイエスは、

「ああ、このザアカイの家にも救いがやってきた。目覚めてくれた。お前のような者こそ救われてほしいんだ。私が来たのはお前のような者を見つけて、そして本当に神の子とする、それが私の使命だ」

10 それ人の子の来れるは、失せたる者を尋ねて救わん為なり』

と仰った。

### ● エリコのザアカイ

こここのところの先生の解説を読みましよう。204頁です。

《エリコのザアカイ

……エリコという町は、当時ローマの一州であるところのユダヤの東辺の相当重要な町で、今でいうと税関みたいなものがあり、その税関の取税人の長のザアカイという名前は、旧約から来ていて、「純潔」「潔白」という意で、税吏は当時ローマの官憲の手先となっていたので、ユダヤ人には非常に嫌われ、そして、自分の懐を肥やしているいわゆる「取税人」で、「富者」と特に書いてあるわけである。イエスの如何なる人であるかを見ようと思ったけれども、背丈が低くて群衆のために見ることができない。イエスのことは既に、うわさで充分聞いているので、「どんな人だろう」と、とにかく、一代の預言者イエスを見ようと思ったわけである。

ところが、このザアカイという人は、普通の取税人とは、ちょっと人物がやはりどこか違っていたと思われる。取税人の長であるならば、もっ少しその振舞も、勿体ぶるわけだけでも、それとは反対に、「前方に走り出て、桑の木によじのぼる」という



いかにも卒直な人柄だった。  
イエスとザアカイの出会い

……「いちじく桑」という植物で、かなり大きくなるたちのものであった。……「イエスはその場所に来たので見あげて彼に言った」とあるように、イエスの方が逆に、ザアカイを仰ぎ見た。樹の上によじのぼった奇人がいたので。

「ザアカイよ、急いでおりてきなさい。今日、あなたの家にきつと泊まるからね。」  
さあ、どうしてこのイエスはザアカイという名前をご存知であるか。あるいは、ザアカイという人物のことを聞いておられたのかも知れない。けれども、この木の上の人がザアカイであるということをし、どうして知ったか。まわりの人たちが「あ！ ザアカイだ」といってさわいだかかも知れない。とにかく、イエスはいきなり名を呼んで、「急いで降りてきなさい。今日、私はあなたの家にきつと泊まるからね」と。ザアカイは急いで降りて、喜んでイエスを迎える。ところが、人々がみなこれを見て咥くはいていうのに、「イエスは罪びとのもとに泊まり客となって入っていった。」……そんなけらわしい人の家に入って客となるとは、とあやしんだわけである。

イエスの言ことばの中で「きつと」と私が訳した言は、ギリシア語では「デイ」という語で、「ざるを得ない」という強い言である。イエスという人の言行はすべてこの「ざるを得ぬ」天的必然性、靈法に即したものであることに深く注意しなければならぬ。

さてザアカイの「前方に走り出て桑の樹によじのぼる」という行動は、身分も、体裁ていさいも、他人のおもわくも考えず、イエスという人物を見たさの一念、一切の他念を捨ててしまった一念の故であった。》

こういふところをちゃんと捉とらえられる先生の着眼は非常に素晴らしいと思う。やっぱり、取税人の、立派な税関の長であつたら、それなりに勿体ぶつた行動をしないと、部下からあと何を言われるかわからない。「あのオツチョコチョイが！」と軽蔑されるかもしれない。そういうものはすべて投げ棄すてて、イエス見たさで、今この瞬間をのがしたらもうまた二度とイエスというお方に会えないかもしれないと思つて、パツと行動に出た。しかも、背が低いから見えない。そこで桑の木にバーツとよじのぼつたというわけです。

## ● 人生の決定的瞬間

207頁です。

### 《人生の決定的瞬間》

人生には、決定的な瞬間がある。その瞬間を捉えるか捉えないかが、その人の生涯に大きな開きを来たすものである。そういった決定的な瞬間を棄身すくみでつかまえる。全身を投じて何がどうなつても、その瞬間に立ち向つ。そういった気構えで集会に立ち向つてくる人は一回の集会で非常な飛躍をしたり、回心を起こしたりする。こちらも



一回一回の集會を棄身の態勢でやっている。非連続の連続をもって前進しつつある。》

これだから、小池先生は特別集會なんか行ったら恐かったですよ。僕はいつか言ったと思いますが、あれは1966年だったかな〔1966/7/15 第13回夏期特集(東山荘)第1回「神の像」、東山荘での第1回集會でグッと見回して、

「君たちは氣合が足りない! その目はなんだ、死んでいるではないか。私は命懸けでやっているんだ!」

と言う。僕はその頃、「氣合」という言葉が大嫌いだったんです。

「氣合を入れろ!」

とか言われたら、何かこわばってしまうんですよ。それこそ、「肩の力をぬいて楽に」と言ってもらったら楽ですけども、「氣合が足りん!」と言われたら、こわばってしまう。ところが、その頃の先生はそういうことで、グッと睨み付けるわけですよ。それから、

「集會に来るなら、金がなかったら歩いてでも来い!」  
と、こうですよ。

「おにぎりを持って歩いてでも来い。電車賃がなかったら歩いて来い!」

と、そういう氣構えです。道を求めるといふのは、それだけの棄身の覚悟でなければダメだ。寝ころがっている所へ自然に流れてくるものではないと。やっぱり、人間の側から本当に「求めの切なるにより」という氣持ちが要る。その切なる求め——でも、求めたから与えられるわけではないけれども——その体勢が必要である。その体勢で来た時にガツンとやられて自分の破れに氣づき、砕け、砕かれ、そして本当の砕けを賜って、本ものが流れてくる。この産みの苦しみというものがなかったら、そんな「家宝は寝て待て」と自然に來てくれるわけではない。

「それが道を求めるといふことだ。日本の精神史にはそういう人たちの流れが脈々

と流れている。みんな命懸けだったんだ」

と。先生はそういうことを求められた。

だから、私たちは、集會というものをもの凄く大切にす。ここは愛の漲っている所ですけれども、そこでどなたにお会いするかというところ、イエス・キリストという方にお会いする。その方は自分の身を棄てて、私たちを救い出してくださいました。そのお方のところへ私たちは何をしておいても来る。どんなことがあっても来る。

「二端、鋤に手をつけた人は後ろを振り返ってはならない」

と仰ったですね。

「父を葬りに行かせてくださいとか、何々させてくださいとか、そういうことは言うな。こうと決まったら、まっしぐらに來い!」

と。そこで本当のものをいただいたら、それからお父さんお母さんのことをいくらでも供養し、救ってあげることが出来る。情に流されて、留まっていたら、本ものが流れない。



サタンというのは、そういう人の情に訴えて、

「集会に行かせまい、行かせまい」

というふうに邪魔をする。特別集会の直前になって、いろんな邪魔が入る人が多いんですよ。それはその人が主さまから愛されているから、その本ものの集会にその人が行ったらもうサタンの子分が一人減りますから、サタンの縄張りが減るから、それで邪魔をする。そういう時にひるんではならない。その時には、あとの全責任は主さまが負ってくださいと思って、出かけるんです。だから、私は先生の特別集会に行く時には、

「嵐が来ようが台風が来ようが電車が止まろうが、そんなものは何だい。これはキリストが招いておられるんだから、行くほかないではないか」

と。そういうことで私は特別集会に行きました。ときには、N君が熱を出して、「もう行けない」と言い出したから、僕はその晩、N君の所まで出かけて行って、

「熱が何だ、一緒に行こう、俺は担いでも行くぞ！」

と言って、無理やり連れて行った。それはやっぱり先生が全部悪いんですよ、そういうふうに私をしたんだから(笑)。その後は先生は割合におとなしくなられたから。でも、そんな時、心ではどう思っているかわかりませんよ。

「私は熱が出て行けないんです」

「そうか、いいよ。休んでいなさいね」

と、そう電話で返事なされても、心の中では

「熱がなんだ。行かないとダメだ！」

なんて、そういうふうに思う先生なんです。だから、そういう棄身の角度というのを、この小池道場で皆さんは学ばれたと思います。それは皆さんを愛すればこそその烈しい言葉なんです。

この「決定的な瞬間」「やむを得ざるなり」ということ。そして、その次の208頁に入ります。

《今日、きつと泊まるからね》

……イエスは木の上のザアカイを一目見て、「ああ、この男は本当にいつわりのない魂だ、救われるべき魂だ」と直観したのであろう。人間は皆五十歩百歩。仕方のない者である。けれども大事な一事は、その人がある瞬間に、本当にあるがままの自分を赤裸々に投げ出して、ひたすら絶対なるものに体当りするかということである。たとえば、あるがままの、分裂のままの自分をそのままぶち込むことが、分裂のない突破・突入という逆説的真相である。いわゆる真実でも、

藤井先生が集会で、「人間は真実が大事だ」と仰ったら、そのお弟子さんたちが、「真実、真

実。あの人は真実が足りない。この人は真実だ」とか言ったそうです。だから、

力りきんだ信仰でもない。そこにはしこりもこわばりも、つくろいも整いもない。破れで

あり、砕けであり、全的突破であり、突入である。行き詰り、苦しみ、悲しみ、落胆、



何であってもいい。そういう破れをさらけだしてキリストの中に倒れかかったらいい。キリストは必ず、きつと迎えて下さる。抱きとめて下さる。俄然、力が来る。みたまの力である。キリストは心身一切に対する万能薬である。無代価で最高の薬が与えられるのに、人々はこれだけを遠慮して受けようとしない。何たる損害ぞ、何たる愚かさぞ、何たる躓きぞ。み霊の味を知った者は、これを何ものとも替えようとは思わない。「私は今日、あなたの家にきつと泊まるよ」は「泊まらざるを得ない」であるように、ルカ13・33の「今日も明日もその次の日も、私は進み行かざるを得ない」である。…そのようなわけで、キリストの愛の迫りは、泊まり、となると申して可い。「愛の迫り」、それが内住して下さって、いつも一緒にいて下さる。

…キリスト者とは何か。キリストをうちに宿している者である。…「み霊があなた方の内に宿っているなら」とあり、「キリストのみ霊を持たない人がいるなら、その人はキリストのものではない」と同節でパウロは明言している。どんなに学問的に、神学的に聖書が理解できても、現に十字架の贖罪にあずかり、み霊のキリストを宿していないなら、これは聖書がいうところのキリスト者ではない。み霊が宿っていないければ、キリストの生命がないからである。パウロが「キリストわが中に」「われキリストの中に」という消息を書翰しよかんの中で百回以上も語っているのは、この現実である。》

### ●キリストからの近づきとキリストへの近づき

それから飛ばしまして次に211頁、「キリストからの近づきとキリストへの近づき」のところに入ります。我々の方からは「求めの切なる祈り」をしているとか、我々の方から「御名を呼んでいる」ことを指しています。つまり、我々の自覚としてはそうなります。けれども、その呼ばしめている方がいらつしやるわけです。我々に求めようという心が起る時、実はそれはキリストのご本願が私に働いて求めさせてくださっているんです。人間にはそんな殊勝しゆしょうな「求めよう」なんていう気持ちは滅多に起こらない。それなのに「求めよう」という気持ちが起こるのは、それももうキリストのおはからいの中に入っているんです。

だから、人間は惨めになった。それだけ見てたら惨めです。しかし、その惨めさが却って「主さま！」という呼びかけを私の心に呼び覚ましてくれた。そうすると、あの惨めな体験は実は恵みだったと気がつくわけです。あれがなかったら私は呼ばなかっただろう。キリストが呼ばしめてくださった。キリストが呼ばしめてくださったということは、呼んだ瞬間にキリストはもう我々を捕まえてくださっている。私はキリストに近づいていく。それはキリストの方から近づいて来て、私を捕まえてくださる。そういうことだというのが、「キリストからの近づき」とキリストへの近づき」の項で理解されるわけです。続けて211頁のほどから、読みあげます。

《キリストからの近づきとキリストへの近づき



人間の側でいうと、人間のたましいはいかなる文化文明の有形無形の財をもってしても、それで死んでも死なないほどの生命にみたされることはない。してみるとたましい(霊)というものは、実は神に最も飢え渴いでいるわけなのである。霊は霊の窮極的実在に対して根源的な飢え渴きをもっているわけなのである。

それゆえ神の慕い求めに対して、人間の慕い求めで応えるのが最も自然なたましいの態勢なのである。

神さまの方から「妬むほどにあなたの霊を愛している」と仰って下さる。そのような慕い求めが即ち祈りなのであって、たましいは実は祈らざるを得ぬようにできているのである。祈りを忘れたたましいは、歌を忘れた鳥のようなものである。

キリストが「天国は近づいた、心を回らせよ」といわれたのも、天来の神の呼びかけ、天国の到来、本願の成就に対して、たましいの目ざめを警告されたわけである。

エレミヤ記30・21に、神の言としてこう書いてある、「私は彼をわたしに近づけ、私が彼に近づく」と。しかれば、人間の側から、何者に対してよりも、神に近づくのが人間の第一義的な在り方ではないか。近づいて来たのは神であった、キリストであった。これに生命賭けの態勢で近づいたのがザアカイであった。そこにザアカイの救いがあった。

私たちも限りなく、このキリストの中に、みたまのキリストの中に、聖書の中に、福音の中に、近づき、進み、入ってゆくだけである。

「深みに乗りいだし網をおろして漁れ」と。キリストという「深み」、キリストの恵みの深み、その中に乗り出して、そしてそこに魂の網をおろす。魂をおろす。

突入である。立場も、主義も、主張も何も無い。いわゆる信仰でもない。信入、でもいった方が適切なようだ。

私はキリストの十字架の贖罪で、自分の側に何も無い者、無者にされた。これは信仰の根源現実である。するとみ霊(たま)がのぞんで来て宿って下さる。かくて無者は無限無量者の質を賜る。ふしぎな現実である。……

「今日、救いはこの家に来た」

このようなイエスに出会って、ザアカイは先ず自分の前非(ぜんび)を痛く悔い、貧者への施しや、搾取的行為(さくしゆ)の代償を誓った。そついう砕けた心をイエスは無条件によるこんで、「今日、救いがこの家に来た」と宣言した。人々に蛇蝎(だかつ)のようにきらわれている取税人たるザアカイも、本来アブラハムの末である。信仰の芽生(めばえ)があれば、血肉ではない霊のアブラハムの末なのである。「人の子が来たのは、失われた者をさがし出して救っためである。」

この場合のイエスはまた十字架にかかってはいないイエスである。十字架以前のイエスが「今日、救いはこの家に来た」という。イエスは神学者のような考えでものを

言わない。イエスそのものは十字架も聖霊もみんな渾然と身につけておられるからである。我々もキリストを迎え入れるとき、何らおそれはなくなる。十字架、復活、聖霊の主を渾然と体受することである。かくて本当に救われ、生かされてゆく。そういう不思議な世界である。》

今日の、「砕け」そして「突破・突入」のところで言われている「突入」というのは、私はキリストからの御霊の突入だと思えます。実は本当の「砕け」をいただいた時、「十字架の砕けが私のものだ」ということに気付かしていただいた時に、間髪を入れずその時に御霊が突破突入してくださっているんです。先生は段階的に書いておられるけれども、事態はほんの一瞬です。

「十字架を見た時に、あそこにあなたの砕けがあるんだよ。私はあなたの砕けきれないあなたをあそこで砕いてしまった。『わがこと終わりぬ』と言った時に、もうあなたは砕かれてしまった。あなたはなくなっている。それにはたと気付いたその瞬間に私はあなたの中に突破突入したんだ」

と。キリストからの突破であり、キリストからの突入。それが聖霊のバプテスマなんです。聖霊の内住なんです。その時に、ある人はもの凄く燃えたり、異言が迸ったり、全身が痺れたりする。それはひとつの現象です。けれども、本質的には毎日毎日、私たちは集会ごとにごうやって祈っている時に、それを体験しているんです。集会ごとに聖霊に内住していただいて、しっかりとそれをいただいて、そしてまた明日も次の日も進んで行く。その繰り返しなんです。先生の晩年のテープ(録音)のお話をずっと集会で聴いてますよね。どの回もどの回も同じトーンなんです。

「十字架で私は砕かれてしまっています。無者にされています。無限無量者にされています。聖霊が私を満たして、私を叫ばしめてくださいます。私は何者でもありません。皆さん、御飯を食べるでしょ。毎日毎日同じ御飯でしょ。でも毎日食べる。三日分ためて食べることはしない。空気だつて毎日毎日、瞬間瞬間吸っている。キリストの霊の生命を吸ってください。それがキリスト者です。そうしたら、あなた方の業というものは神の業としてひとりで展開していきます。私は語りながら、その次元の中に入って語っているんですよ」

ということを先生は仰る。西千恵男兄弟が『天弓録』というのを作ってくださいていますけれども、それを読みますと、本当に毎回毎回同じところをグルグル回りながら進んでおられる。

〔註：『天弓録』とは小池辰雄の日曜聖書講筵の要旨を書き列ねた語録。「天弓」とは天に懸かる虹のこと、小池辰雄の最晩年の雅号〕

それで「飽きた」と思った人は負けです(笑)。「ああ素晴らしい」と思って、読みながらそ



の中に祈り入っていく人は進んで行きます。あれは躓きの石です。

人間というのは新しいものが好きですから、流行というのはいくらもすぐ廃れて、また次のがやってくる。そこへ跳びついていく。ところが、先生はおよそ流行に跳びついていくことは違う。同じトーンがグルグル回っていますけれども、その中に入った人はどんどん進んで行く。我々だってそうですね。

「ああ、今年も桜が咲いた。素晴らしい！」

「去年も咲いたじゃありませんか」

なんて。そうではない(笑)。やっぱり今年の桜、今年の鈴蘭、今年の薔薇、見る日ごとに新しい感動に魂が震えるという、そういう生きざまをしていく人。路傍のタンポポに感動し——今日も新大久保から歩きました時にケシの花のようなものが咲いていました——ああいう路傍の花に「ああ素晴らしい」と感動していく、それが福音の心だと思っただけです。路傍の花に感動し、それと同時に主さまに感動するという、二つのことが通じているようなものです。私も先生の本を読んだり、福音書に触れたりする時に、そういう感動に震えて読めるときは非常に幸せだと思っただけです。ところが、時には何も響いてこない時があるんですね。悲しいですね、そういう時は。気持ちがあせっているんですね。

「しばしの時をキリストの中に祈り入る」

と先生が仰ってくださいました。祈り入ること。そして、

「十字架を瞑想しなさい。十字架のキリストを瞑想し、それからキリストが湖の上を歩いてこられる場面を瞑想しなさい。湖の上を歩いてこられたら、そこでキリストと一つになりなさい。ザアカイの姿になりなさい。『我を憐れみたまえ』と叫んでいるその人の姿になりなさい。祈りの中で、福音書のいろんな場面を瞑想してください。そこに自分の身を置いて、そこで主さまと一つになってください。福音書はたくさん読む必要はないですよ。一つの場面を深く受けとりなさい。『深みに乗り出し網をおろして漁れ』と仰ったあの主さまとペテロとの出会い。そこに自分の身を置いて、そしてキリストご自身をいただくんですよ」

と。キリストをいただいたら、

「もう、勝ったようなものでございます」

と。この台詞は毛利元就せりふ もうりもととなりだったかな、大河ドラマに出てきます松坂慶子が扮した女性が「もう、勝ったようなものでございます」という台詞を言う場面がありましたね(2)『大河ドラマ』『毛利元就』、放送：1996～1997年度。あの台詞が私は大好きなんです(笑)。勝ち負けに囚われて申し訳ありませんけれども。「勝ったようなものでございます」というのは「既に得たり」ということです。



## ●第四相「内住・常燃」

このように、主さまに出会ったら必ず聖霊が内住してくださる。次に第四相に行きます。214頁、「内住・常燃」のところでは、「葡萄の樹」の話が語っておられます。ヨハネ伝15章11節から、

「11我は真の葡萄の樹、わが父は農夫なり。12おおよそ我にありて果を結ばぬ枝は、父これを除き、果を結ぶものは、いよいよ果を結ばせん為に之を潔めたもう。13汝らは既に潔し、わが語りたる言に因りてなり。」

ここも先生の得意なところですね。

《まことの葡萄の樹(ヨハネ伝第15章1〜9節)

本体と影像

……

„Alles Vergängliche

Ist nur ein Gleichnis.“

「すべていついゆくものは影像に過ぎず」といつのがある「ゲーテの『ファウスト』の中の詩句」。……

あたかもそれと同じようにイエスは、「私の方が本当の葡萄の樹で、あそこに成っている葡萄は私の似姿である」と。……また、ヨハネ伝4章に記されたサマリヤの女はイエスさまに呼びかけた。そしたら、私の中から流れ出る水が本当の水だ。このヤコブの井戸の水を飲んでもまた渴くではないか。しかし、私が与える水は永遠の泉となつてその人の中に湧き溢れ出て涸れることがない。そういうことを仰った。

……これらはみんな、本体界の根源現実を現象界の現実をもつて表現せんとしてい  
るわけなのである。……》

と。

## ●内住

「内住」のところに入りましょう。217頁です。

《内住

「おおよそ我に在る枝にして果を結ばざるは、父これをとり除き、果を結ぶものは、更に果を結ばんためにこれを潔め給う」(ヨハネ15・2)

本当に「キリストに在る」者なら、果を結ぶのは当然であるが、「キリストに在る」という在り方が、観念的であるか、霊的であるかで、果を結ばぬか結ぶかにわかれることをキリストは語っておられる。葡萄の幹につらなっている枝でも、日あたりがわるかったり、虫に喰われたり、害虫が技の中にもぐりこんだり、風通しが悪かったりすれば、果を結ばないわけであるから、人間の現実でも、自分の信仰の在り方が、環



境や運命や誘惑などでぐらついたり変つたりすれば、果を結ばぬことはいくらでもあ  
る。

「キリストに在る」ということが本ものであるとキリストの生命がはたらくから枯死  
することはない。そついう枝は果を結ぶから、キリストはいよいよ霊生をもって潔め  
給つ。

「汝らは今や潔し、わが汝らに語りたる言に因りてなり。我に居れ。さらば我も汝  
らに居らん。技もし葡萄の幹に居らずば、自ら果を結ぶ能わざる如く、汝らもわ  
れに居らずばまた然り。われは葡萄の樹、汝らはその技なり。我に居る者あらんか、  
我も彼に居らん。彼は多くの果を結ばん。我を離れんか、汝らは何ごともなし能  
わず。

誰にてもわれに居らずば、技の如く外に棄てられて枯る。人々かれらを集めて  
火に投げ入れ、彼らは焼かるるなり。汝ら我に居り、わが言汝らに居らば、何に  
ても望むがままに求めよ、さらば汝らに成らん。汝ら多くの果を結ばば、わが父  
これによりて栄光を受け給う。しかして汝らはわが弟子と成らん。父の我を愛し  
給いし如く、我も汝らを愛したり。汝らわが愛に居れ！」(ヨハネ15・3-9)

以上のキリストの言には「居る」という語がたみかけて出ている。原語「メネイン」  
は、あるものの中に「留まっている」、「宿っている」という意味の語であるから、枝  
が幹につらなって不可離のように、自分がキリストの中に宿ること、キリストがわが  
中に宿ることで、泊まり込む非常に生命的な親しみ深い言葉である。日本人にはよく  
つかめる事態である。信仰とはそのようにキリストの生命の中に宿り、泊まり、住む  
ことで、常任的な事態である。

それではそれはどのようにして可能か、ということになると、どうしても深い祈り  
を要する。祈り入ることを要する。祈りとはおのれをキリストの中に投じ入れること  
である。それはどうして可能か。それはキリストの門を通ることを要する。キリスト  
の門とは何であるか。それは十字架という門である。こついう漢字はないが、門構え  
の中に十の字を書いたらハッキリするだろう。十字架は罪のわれを無条件にゆるして  
通らせて下さる門である。「われは門なり」とはそついうことだと私は思っている。  
平伏して無条件にこの門を通らせていただと、その先は聖霊の気の漂うすばらしい  
「緑の野べ」、「憩いの水ぎわ」で詩篇第23篇さながらの現実である。すなわち、わが首  
に聖霊の油がそがれ、われという杯は聖霊の水であふれるのである。このように、  
十字架を真に受けとると、必然聖霊のバプテスマにあずかることになる。これを祈り  
において深く体受することである。聖霊を賜らずして、「我キリストの中に泊まる」と  
か「キリストわが中に泊まる」とか、申しても、それは空言にすぎない。……》

こつこで先生は祈りのことを仰いました。これまでの「破れ」「砕け」「突破・突入」のこ



ろではどちらかというところ、「祈り」のことはちよつと抑えて書いておられます。

「自分を投げ入れることが祈りだよ」

ということとは仰っているけれども、あまり表に強く出しておられなかった。ここで祈りが出てくる。さきほどの「破れ」「砕け」「突破・突入」、それを順序を追って説いていきましても、それはへたすると説明になります。構造論になります。

「この構造はこうなってますよ」

「はい、わかりました。そうですね」

と、説明の理解で終わったら何にもならない。どうしたら「破れ」「砕け」「突破・突入」が本ものになるか。その最後のところは祈りによるんだよという。

ここところが大事ですね。祈りとはキリストの中へ自分を投げ入れることである。キリストにわがうちに突入していただくことである。それはもう深い祈りによる。ここからはもう説明できない。ご自分で実際にやって体験して頂く必要があります。

私は、集会というのは祈りの集会が本ものの集会だと思う。だから、集会の半分は祈りであってほしい。先生のお話を聴いている時も祈り心で聴く。澤田さんは先生の話全部プリントして配ってくださっています。それは後でまたお読みになればいいので、先生の話聴く時にはもう合掌して、祈り心で聴いてほしい。聴きながらキリストの中へ入る。よく先生は、

「話すも聴くも同じこと」

と仰った。話す先生はいつも十字架の中に自分の身を投じています。先生がキリストの十字架のことをしゃべると、必ずといっていいほど異言が出てきます。というのは、その中に自分を入れて、毎回その中から語り出されておられるから、毎回同じことを言っておられるようでありながら、先生にとっては日々新たなんです。そのことを本当に体得して、一緒に祈る。これが私は御霊に在る集会だと思う。

武道の道場をご覧なさい。剣道の稽古でも、柔道の稽古でも、同じトレーニングを毎回繰り返すわけですよ。野球のバッターだって素振りは何百回と繰り返すわけです。守備練習も同じことを何回も繰り返す。時には何時間も。そうするともう無意識にからだは反射的に反応し、本当のプレイができると言います。頭で考えて

「この次はこう取ってこう投げて」

なんてやったらダメで、本当にもう無意識に反応して、

「からだは反応しました」

とよく言いますね。私は祈りの世界も、福音の世界もそうすることが大事だと思う。私たちはたくさん知識を学ぶ必要はない。こういうものを材料として、大事なことは生活の中で、先生が告白してくださっているこの宝物をいつも心にいただいて、どんな所でも「主さま！」と呼ぶことである。



「一言『主よー』と呼べば、直ちに聖霊の世界に入る」

と先生は言われた。だから、「主さま!」と呼ぶと同時にキリストの懐へと飛び込んでいくわけです。水泳の時に「よいい、ドン!」で一斉に飛び込みますね、ああいうふうにして。

「主さまー!」

と呼ぶと同時に体が躍り込んでいるという思いで、私たちも具体的にイメージしないダメです。このイメージ・トレーニングというのはもの凄く大事なんです、スポーツの世界でも。私たちもこのイメージ・トレーニングでキリストさまの中へ躍り込む。そうしたらキリストさまが抱いてくださるといふイメージ・トレーニングをする。

「祈りとはおのれをキリストの中に投げ入れることである。それはキリストの門を通ることだ。そこには十字架が立っている。」

と。その十字架は、

「われ汝を贖いたり。私はあなたとそこで一つになっているよ。あなたはもう罪無き者とされている。私が全部片付けた。雲散霧消させた。何も心配いらぬ。さ

あおいでー!」

と言つて、手を広げてくださっているのが十字架なんです。よく先生は、

「破れたままでいい。頑かたくなら頑かたくのままでもいい。分裂なら分裂のままでもいい。整えてからなんて思わないほうがいい。その時その時のあるがままの姿をキリストに全的にぶつけなさい。子どもの姿がそれだ。子どもは遊ぶ時は夢中、喧嘩する時も夢中。何する時にも夢中で分別がない——分別のないのはよろしくないけれども——その姿は全的だ。その姿を受けとりなさい。」

と。体裁とか、そんなことではない。ザアカイは体裁を捨てた。「イエスさま!」と、それをイエスさまはグッと捕まえて、

「お前の家に絶対泊まるからね!」

と、そこに火花しているんですね。次に219頁のところに移ります。

《ペンテコステにおいて弟子たちや女どもが一団となって心を合せ、ひたすら祈り続けていたところに聖霊が臨んだように、心を合せて祈る群に聖霊がのぞむ場合が多い。それでキリストがここでも「汝ら」といって複数で語っておられるわけである。エクレスシア(召団、召されたる者たちの群、普通「教会」と訳しているが)とはそのように聖霊をうけた群のことであることを銘記すべきである。歴史的にはそのようにキリストを首かしらとし、聖霊を受けた群かたを体とした構造の自覚で、この体がエクレスシアである。それで「われキリストの中に」という個人的自覚が同時に、我々は互いにつらなる枝であるという連帯性と一体になっている。愛はこのように、縦と横との両面をもっているから、キリストが、神を愛することと、隣人を愛することとは一つだと説明している。所以ゆえんである。勿論聖霊を受けるといふことは深い祈りにおいて個人的にも体験できるが、



——預言者も使徒もそついう場合があった——聖霊は必ず愛としてはたらく霊である。かくてキリストとの交り、内住関係は聖霊のバプテスマを通して、聖霊の内住を以って、現実となる。聖霊は火にもたとえられる。天来の愛の火であるから、この火はいかなる人生のあらしにも消えない、祈りをもって神・キリストと交っている限り。内住の霊、常燃の火として聖霊を有つことは実存の最も中心の事態である。

### 結実

さて葡萄の根幹から枝葉に流れてくる樹液のように、人体においては心臓から血液が流れてくる。そして「血は生命のあるところ」と言われている(創世記9章)。そのように、キリストの生命は、霊生で、聖霊のもつ生命である。であるから、み霊を宿してキリストとつらなるとき、謂わば霊血があるわけで、これが果を結ぶ源である。聖霊が結ぶ果は、パウロがガラテヤ書5・22で語っているように、「愛、喜悅、平安及び平和、寛容、仁慈、善良、忠信、柔和、節制」等である。

そうですね、その人の人となり、姿が「愛、喜び、平安——そして人との間では——平和、人に対する寛容、慈しみ、善良、忠信、柔和、節制」で形作られていることです。こういう徳目が自ずと備わっている人は、どういう場面においても人から重んじられます、人は信頼します。それから人に警戒感を与えない。人に平安を与えます。これはキリストの御霊がその人に結ばせてくださる実なんです。性来、短気な人間、怒りっぽい人間、いろいろあるでしょう。それは消えない。誰にだって欠点はあるんです。欠点だらけなんです。本来。でも、そういうものを乗り越えて、こういう実を聖霊は結ばせてくださる。これがいわば本性的な姿なんです。それから、武器として賜物というのがあります。これは人が働いていく姿です。それが賜物です。

また聖霊の賜物としては同じくパウロがコリント前書第12章で挙げている如く、

「智慧の言、知識の言、信仰、病を医す賜物、霊能の業、予言、弁霊の力、異言、異言を釈く能力」等である。……」

これはいわば武器ですね。邪悪な霊を追っ払い、そして病んでいる人を救い上げるといふ、武器として働くものです。それに対して聖霊が結ぶ実と言いましたのは、もう少し本質的なものです。御霊の結ぶ実、そういう二つが「カリス」と「カリスマ」。「恵み、愛」そして「そこから流れ出るもの、人に働きかけるもの」、そういう二つの区別だといってもよろしいと思います。

### ● 聖潔

それから次に、「聖潔」という所、221頁に入りましょう。

「汝らは既に潔し、わが語りたる言に困りてなり。」(ヨハネ15・3)

この聖句は私には初めちよつと躓きだつたんですよ。



「まだイエスさまは十字架にかかっていないのに、御言を聞くだけで本当に潔まるの?」

と思った。けれども、先生がさつき書いておられたように、イエスの御言というのはもう先取りしてしまっておられる。すべてを先取りして、

「汝の罪、赦されたり」

とよく仰った。

「まだ十字架にかかってないじゃないの?」

と、そんな問答は無用なんです。イエスさまは、その瞬間瞬間に全的に自分をぶつけておられますから、もうイエスの語られた言葉で本当に潔まってしまっただけです。

《聖潔

……贖罪の血によって既に潔められているのである。「わが語りたる言」を端的に信受することによって「今や潔い」のである。「永遠の御霊により、瑕なくして己を神に献げ給いしキリストの血は、我らの良心を死にたる行為より潔めて活ける神に仕えしめざらんや」(ヘブル9・14)である。……

キリストに躓いた祭司、律法学者、パリサイ人、サドカイ人たちは果を結び得ず、キリストに平伏し、泣き、叫び、しがみついた取税人、遊女、罪びと、病者、不具者たちはまずイエスに救われ、やがて十字架の贖罪による潔めと聖霊による聖なる熱き愛の生命にあずかって本当に聖名を讃えることができたにちがいない。

万能の愛

キリストが、上掲の如く、「我を離れんか、汝らは何ごとをもなし能わず。……汝ら我に居り、わが言葉汝らに居らば、何にても望むがままに求めよ、ならば汝らに成らん」と言っているように、み霊に在ってキリストに内住することをやめたら、霊的な力がなくなるから、本当のことができなくなる。またキリストの言は霊言で、聖霊と共にある言葉であるから、キリストの言葉が泊まるということと、み霊が宿るということとは不可離である。それゆえに聖言がわがうちに泊まっていると、力があるから、望むことが成ってゆく。キリストの言は万願成就を約束するかの如くである。《

「活かすものは霊なり、肉は益する所なし、わが汝らに語りし言は、霊なり、生命なり。」(ヨハネ6・63)

とあります。そのように御言と御霊は一つなんです。ですから、キリストの御霊が、御言が胸のうちでリンリンと鳴っているときは、御霊がそれを奏でてくださいているんです。御霊が内住してきますと、キリストの言葉を読んでも、それが生き生きとピンピン響いてくる。そういうふうにはこれは関連し合っておりますから。

《ごちらの悲願はそれ以上の本願に包まれて成ってゆく。けれども現象や結果を問題にしてはならない。どう現象しようが、結果しようが、み霊に在っての悲願は根源現実



において成っていることが確実であることを信じて往くのみである。み霊にある祈りの力はそこにある。聖霊は力ある愛の霊であるからである。み霊にある祈りの成就において、現われるのは神、キリストの栄光である。》

そうなんです、最後は神・キリストの栄光が現れるんです。その人のお手柄とかいうものではない。だから、その人を通してどんな御業が現れようと、それは御名を讃えるのみであって、もし自分の功績にしたら、その時に自分がもう神・キリストの栄光を私したら、その時は霊がすり代わってしまっんですね。だからよく小池先生は、

「いよいよ平伏して行きなさい。恵まれれば恵まれるほど、鮮やかな御霊の働きにあずかればあずかるほど、いよいよ平伏して行きなさい。どこまでも平伏しの魂でいきなさい」

と言われた。平伏している魂、砕けをいただいている魂のところには、サタンは来れない。十字架があるところにはサタンは来れない。十字架がはずれますと、現象に囚われますと、足をすくわれることがあります。そしてまた現象を起こす人に憧れて、その人を慕って行きますと、足をすくわれます。だからどこまでも、根源現実を告白しているかどうか。十字架の根源現実を受けとって——「自分が良いの悪いの」なんか問題ではない——すべては主さまから流れてくる。だから、「無者」なんです。

「私は本当に無者ですよ」

といつて告白している。そして、

「キリストこそが最大の無者である。人間小池はキリストに在る無者である」という。

「小池の根源現実は無者、キリストの無者である。相対的な人間小池は、なおいろいろゴタゴタしたものがまとわり付いていようと、そんなことは問題にしてません。そんなことが問題になるようなら、福音ではない。審く人には審かせておく。私はキリストにすがって生きる。『汝、今日、我と共にパラダイスに在り!』、これが一番好きな言葉だ」

と言われた。

《父の我を愛し給いし如く我も汝らを愛したり。わが愛に居れ》(ヨハネ15・9)という言葉は聖書の中で極めて重要な聖句の一つである。イエスが神を信じぬいたのも、父なる神の愛に圧倒されていたからである。信ずるといふことは愛するということと一つのことである。信愛一如、愛信一体なのである。神がイエスに「われ汝を愛す、汝を悦ぶ」という声を降し給うたのは、ヨルダンでイエスが聖霊のバプテスマを受けたときであった。父の愛をみ霊において受けたキリストは、同じみ霊の愛を以って弟子どもを愛し抜いた。だからいよいよ「わが愛に留まって居よ」と言った。ということとは、み霊を宿してわが愛を受けて暮せよ、ということである。そしてその愛はまた



おのずから隣人に流れてゆく。そうでないならそれは聖霊の愛ではない。聖霊の愛は火の如く燃え移り、泉の如く湧きて流れる。》

御霊のバプテスマというのは、特別集会だとかそういう時にもの凄く烈しく臨んで、そして体験をなさったりいたします。集会そのものがそういう烈しい火にバプテスマされることがあります。けれども、それは突破口であって、そこからあとは静かに常燃の火となつて燃えていく。そのことの大事さを、先生は仰いました。

マッチもすつた瞬間バーツと燃え上がる。そしてあとは静かに燃えていきます。そういう静かに燃えていく姿が大事です。いつもあの御霊のバプテスマみたいにウワーツとやっていたら、これはもう仕事も何もできませんし、また周りの人たちも

「あれは何だ!？」

ということになりますね。だから、あの聖霊のバプテスマは神さまの側からのもの凄い恵みですし、神さまの側からの大手術である。刻印づけをしてくださったんだけど、そのあとは静かに常燃の火となつて燃えていく。そのことを先生はここで語ってくださいている。

「聖霊の火は愛の火である。それはおのずから隣人に流れてゆく。そうでないならそれは聖霊の愛ではない。聖霊の愛は火の如く燃え移り、泉の如く湧きて流れる。」

と。それでは、先生と一緒に告白する『無者キリスト』の話は、これで終わりいたします。

## ● 祈り

どうぞ、キリストを瞑想なさってください。十字架の主さまが御手をひろげて、

「我を見よ」

と仰ってくださいています。

「あなた自身があそこでもう十字架されてしまっているよ。私はあなたを贖った。

私は十字架にかかりっぱなしではない。あなたを携えて天に昇ったから。今は光り輝いているから。あなたも私の愛の光の中にいなさい」

と。主イエス・キリストさま、今日、こうして五月の新緑の良き日、兄弟姉妹たちをここに集わしめてくださり、老いも若きもまた古きも新しきも共に、主イエス・キリストさま、あなたがご臨在くださるこの新宿集会、この集いの場所に我々は集い祈ることができ幸いです。幸いを心から感謝申し上げます。

今日は、小平集会の兄弟たち、K兄弟ともども来てくださいました。本当にありがとうございます。ございます。そして、今は天界にいらつしやる小池先生が魂込めて書かれたこの『無者キリスト』を繙ひもとかせていただきました。福音書で主さまに出会った人たち、その人たちの魂はいかなる質の魂であったか。人々からどのように見られていたか。おおむねそれはマイナス面ばかりを備えた人でありました。宗教的な自己義認の人たちからは蔑さげすまれ、救いか



ら遠い者とされてしまいましたけれども、主さま、あなたはそういう者の魂に一人ひとりに出会ってくださり、求め以上のあなたの側の御救をもつて抱き取り、出会った瞬間に既にあなたは聖霊をもつて癒していただきました。魂の目を開いてくださいました。

「大丈夫だよ。平安のうちに生きなさい」

と、あなたは慈しきをもつて御言をくださいました。時代は流れ、所を異にしましても、主さま、ここで祈ります時、二千年前のあのガリラヤでの現実が、あなたの現実が今ここにそのまま迫ってきます。

主さま、あなたの中にこの身を投げ入れ、そこであなたと一つになつていただき、あなたからの生命をいただいて、私たちは日々生きて参ります。

「主、われを愛す」

と、あなたの愛が先でありました。あなたの救いの御業が先でありました。そこに気付かされて、私たちはあなたの御懐に帰つて参りました。

「御霊によって始めしゆえに、御霊によって全うせよ」

と。あなたが既に私たちの旧き我を完全に贖い取ってくださいったゆえに、私たちは己の姿を見ず、ただひたすらあなたの御名を呼び、あなたの中に己を見いだし、あなたと一つにされて進んで行きたく思います。

どうぞ、この祈り、我々兄弟姉妹を一つにして導いてください。あなたを求めている一人ひとりの所へ私たちをお遣わしくくださり、また祈りたくても祈れない人たちのために、どうぞ、私たちが共に祈ることができますように。

「我らはいかに祈るべきか知らざれども、御霊言い難き呻きもて執り成し給うなり」

と。主さま、どうぞ、私たちを一つにしてください。本当に御霊にあつて一つにしてください。主イエス・キリストさま、あなたが一切でございますから、どうぞ、兄弟姉妹をあなたに在りて本当に一つとしてください。所を異にいたしておりましたが、祈りは一つであります。御霊は一つ、バプテスマは一つであります。この尽くしませぬ祈りを主イエス・キリストの御名にあつて御前にお捧げいたします。アーメン。

